

ポストコロナ時代の研究開発

R&D in post-corona era

副学長・学術研究推進センター長（生命科学部 生命科学科 教授） 川口 英夫

日本だけでなく世界中が、2020年（正確には2019年末）から2年間近く、新型コロナウイルス禍に見舞われた。否、未だ終息したと言える状況ではない。局地的な事象ではなく世界中が巻き込まれたパンデミックは、おそらくはスペイン風邪以来100年ぶりであろう。したがって、現在生きている人間にとっては初めての事態となった。この『コロナ禍』は、歴史に残る事態として後世に語り継がれるに違いない。

この2年間、人の行動や移動が制限され、経済活動も多くの制限を受けた。とはいえ、日本は法的な問題もありロックダウンを実施していない。ただ、国民性もあるのか、自主規制に頼ったにもかかわらずロックダウンに近い状況を作り出すことに成功した。もちろん、これにはリモートワークやリモート授業といった通信インフラの活用が背景にあることは言うまでもない。他に現実的な代替手段が見当たらない状況下で、極めて短期間でDX（Digital Transformation）と呼ばれる変革が一部ではなく国全体で始まり、その後余り抵抗なく受容され活用されつつあるように思う。この変革は単なる手段ではなく価値観をも変えてしまった面がある。これを受けたポストコロナ時代では、我々は単に元の世界に戻ることを模索するのではなく、この変革を発展させることが望ましいと多くの人が考えているであろう。

大学において、教育や研究の面でもリモートツールを活用することは当たり前となった。距離の壁や移動時間の節約等、その効用も実感できた。一方、多くの人が、対面でしかできないことがあることも理解したと考える。教育でいえば、なぜキャンパスを持つ通学制の大学が多いのか、キャンパスライフを失った学生の嘆きから理解できる。画面越しの人同士の繋がりは、人となりが予め分かっている者の間ではある程度維持できるが、新

規の関係性を築くことは困難であることを実感した人も多いであろう。人は五感を総動員して人と対峙しているためである。コミュニケーションの内、非言語コミュニケーションの占める割合が9割と述べた研究者もいるほどである。表情や視線のわずかな変化、何気ないしぐさ等を通じた他者理解ができないことは、ビジネスならまだしも、深い人間関係には致命的である場合もあり得ると考える。

研究開発においても、学会発表や共同研究等で大いにリモート会議等が活用されている。それによる効率化はもちろん有難いことも多い。しかしながら、それでも、新規なアイデアは、例えば対面制で実施されていた従来の学会のように、予期せぬ出会いやたまたま耳にした発表から生じたものが多いように思う。いわゆるセレンディピティ（serendipity）による発見や発明は、リモート環境下では生じ難いのではないだろうか。その意味で、国内外への移動が解禁された暁には、大いに他者と会い対面で雑談し議論することを実践したい。

ポストコロナ時代の先のそう遠くない将来、正真正銘のデジタルネイティブの子たちが大学に入学する時代が必然的にやって来る。この世代の若者たちは、「世の中に貢献したい」、「SDGsの推進に携わりたい」といった社会貢献を重視する人が多いとも言われている。自己も他者も尊重し、国際関係や経済、資源や地球環境との関係等々の複雑系を『哲学』し、様々な面から解決策を提案できる人材が本学から多く育つことを期待したい。さらに、ダイバーシティ&インクルージョン（Diversity and Inclusion）が当たり前の概念として浸透し行動する未来も、DX同様、意外に早く出現するかもしれないと夢想している。